

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：34511

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12382

研究課題名（和文）慢性疾患をもつ小児のためのクリニックにおける地域生活型看護ケアプログラムの開発

研究課題名（英文）Development of the community-based nursing care program in a clinic for children with chronic diseases

研究代表者

内 正子（UCHI, MASAKO）

神戸女子大学・看護学部・教授

研究者番号：20294241

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は慢性疾患をもつ小児のクリニックにおける地域生活型看護ケアプログラムの開発である。クリニックで独自の看護ケアを行っている専門家からの情報収集や文献検討からプログラムを試作した。プログラムの構成は、導入、子どもと家族への看護、制度と連携の3つである。内容は、看護職の研修強化、看護職間の交流、気軽に相談できる場としてのクリニック、看護職の調整機能、慢性疾患の子どもと親の特徴と支援、慢性疾患をもち青年期を迎える子どもと親、生活をイメージした療養方法、発達段階の特徴とプレバレーション、受診時の子どもの見方、感染予防、予防接種、子どもに関する助成制度、幼稚園・保育園や学校との連携、である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

慢性疾患児の看護ケアに関する研究は、退院支援や外来での家族の困難やニーズなどであり、地域のクリニックでの看護ケアに関する研究はみられない。本研究は、今後の需要が高まるであろうクリニックに勤務する看護師を対象に、研究者が試作した地域生活型看護ケアプログラムを学習してもらい、それを活用した看護を提供して、定期的に受診する慢性疾患児の家族からの調査によりプログラムの評価をするものである。この点が本研究の学術的特色であり、独創的な点である。これにより、地域のクリニックでの生活志向型の看護が確立され、慢性疾患をもつ子どもや家族の生活の質向上に貢献できると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a community-based nursing care program in a clinic for children with chronic diseases. A prototype of the program was developed based on a literature review and information gathered from professionals who provide unique nursing care in their clinics.

The contents of the program are as follows: strengthening the training of nursing professionals, interaction among nursing professionals, the clinic as a place for easy consultation, the coordinating function of nursing professionals, characteristics and support for children and parents with chronic diseases, children and parents with chronic diseases and entering adolescence, treatment methods with an image of life, characteristics of developmental stages and preparation, how to view children during medical examinations, infection prevention, immunization, subsidies for children, cooperation with kindergartens, nursery schools, and schools.

研究分野：小児看護学

キーワード：小児 看護 慢性疾患 クリニック 地域 生活志向 ケアプログラム

1. 研究開始当初の背景

我が国では厚生労働省より地域包括ケアの体制が推進され、小児医療においては、主に高度な医療的ケアが必要な児に対する、病院と地域との連携や協働のシステム作りが進みつつある。それともなると、地域包括ケアに関する研究は、NICU 退院後の在宅支援、訪問看護ステーションの実践報告や母子保健の観点からの子育て支援の現状報告、地域包括ケアセンターで実施されている子どもの健康教育の実際等の報告がみられている。慢性疾患児の支援として、厚生労働省は地域連携システムを導入して、子どもが生活する地域のクリニックへ連携するように推進しているが、実際には、退院後の治療の効果や療養行動の確認等入院施設の外来部門に通院する児が多く、慢性疾患の子どもに関わる小児看護としては、現在外来看護師がその役割を担っている。

高橋(2014)は、外来看護師は直接的なケアだけではなく、成長発達など育児についての援助や同じ疾患をもつ親の会等の情報提供、他職種との調整、家族内の調整を行っており、家族とのコミュニケーションを心掛け、子どもと親の関わりを観察するなどの方略もみられたことを明らかにしている。そして、外来看護師は小児看護の特徴である家族との関わりに困難を感じているものが多く、院内外の学習機会が少ない、外来では多様な疾患の児に対応する必要があり、急性期疾患の児のケアを優先しているとの報告をしている。筆者が行った外来看護師を対象に喘息指導のアクションリサーチ研究(内他、2012)においても、外来看護師は外来受診の子どもへの処置や検査を安全に行うことに専念しており、自宅での生活管理などの看護ケアに必要性を感じていても、その方法がわからず模索していた。また、勤務している看護師の大半が非常勤であるため勉強会や研修会の機会が得られない状況であった。そこで、視覚的に患者のニーズがわかるようなツールや指導に使いやすい教材等を作成した。その結果、外来看護師は受診時の症状のコントロールや処置のみではなく、継続して子どもの生活をみていく視点の能力が向上した。このように、外来での子どもの疾患のみでなく成長発達や生活環境、家族の生活も含めて、その子どもと家族に合わせた支援を配慮できる看護師は、大きな役割を担っていることが考えられた。しかし、医療施設の外来部門の看護師は、医療処置の時間が一番多く、生活志向型の看護ケアが充分されていないのが現状であり、家族も看護師に質問や相談をすることを遠慮していることが多い。また、少子化や看護教育の変遷により基礎教育で十分な小児看護学を学んでいない看護師も増えており、短時間での子どもや家族のアセスメントが困難になっている。そのため、小児専門病院や高度医療施設では、小児医療の重点化・集約化により小児看護専門看護師が看護外来を設立し、看護の質を向上・維持するようになっている。

慢性疾患の子どもは高度な医療的ケアが必要ではなく、本来は入院していた医療施設の外来部門ではなく、子どもが生活する地域のクリニックにおいて、症状のコントロールや生活指導を受けることが望ましい。また、地域連携システムを推進させるためにも、地域のクリニックでの看護の質を高める必要がある。現在、小児科を標榜するクリニックは 20,872 と年々減少しているものの、全体の一般診療所の 2 割であり、総数に対する割合で内科に次いで 2 番目に多い(厚生労働省、2014)。小児科クリニックでは大半は非常勤の看護師が多く、クリニックでの看護ケアについての先行研究は僅少である。小児アレルギーエドゥケーターである宮島(2015)は、地域のクリニックが担う役割として、子どもの成長と健康を家族と共に見守るところで、幼少期は生活拠点の一部であると報告している。そして、子どもが生活する学校や幼稚園・保育園の多職種に対して、子どもの疾患の理解や適切な対処が出来るよう、情報の共有や相談等の体制作りを行っている。医療施設内の外来部門と異なり、地域のクリニックでは子どもや家族が生活するコミュニティに存在しているが故に患者の生活志向型の看護ケアを展開することが可能であり、外来部門とは異なり、時間をかけて子ども・家族に向き合うことが期待されると考える。

一方、英国では地域小児看護師という職種が存在し、子どものケアの充実に向けた活動を担っている。地域小児看護が重要視している点として、子どもの親が、自分たちがサポートされているということを実感することであり、地域小児看護の理念は、必要とするケアが家庭やデイクリニック、病院の通院施設では十分に提供できない場合のみ、病院に入院すべきであるとされている。それ故に、地域におけるケアの研究として、医療コストの減少や、家族の満足度が高いなどの評価研究がみられる(多田羅、2008)。このように、地域生活志向の看護ケアを提供することにより、慢性疾患の子ども症状のコントロールができ救急外来の受診や再入院の減少、しいては子どもや家族の安心感を高めることに貢献できると考える。

慢性疾患をもち地域で生活する場合、小児看護師はその生活する地域コミュニティの実情を理解し、子どもと家族のニーズに沿った情報のマネジメント能力も重要である。金井(2013)は看護師に期待されるコミュニティケア能力の育成は、生活支援型看護モデルの構築が不可欠であり、コミュニティケアを担う人材の育成が迅速かつ有効に開始されなければならないと報告している。現在、地域のクリニックにおける研究報告はアレルギー専門のクリニックによる看護実践報告等、疾患に特化したケアの報告であり、クリニックの看護師のための地域生活型看護ケアの報告やプログラムの先行研究は見当たらない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、慢性疾患をもつ子どもに対する地域のクリニックでの地域生活型看護ケアプログラムを開発することである。先行研究の成果および文献検討、専門家からの情報収集等を分析し、クリニックで活用できる慢性疾患をもつ子どもと家族への看護ケアプログラムを作成し、その効果検証のため、クリニック勤務の看護師がプログラムを学習し、定期受診する子どもと家族へのケアの前後の調査を行う。

医療施設内の外来での看護ではなく、地域で成長発達する子どもと家族を支える看護ケアプログラムを開発することにより、社会のニーズに沿ったよりよい支援のあり方に示唆を得ることができると思う。

3. 研究の方法

(1) 看護ケアプログラム作成のための専門家からの情報収集および視察

地域の小児科クリニックにおける小児科看護師からの情報収集

先行研究を検討した結果、独立してケアを実践している小児アレルギーエドゥケーターから情報収集を行った。クリニックにおける看護ケアの内容や工夫している点、大事な点などについて意見交換を行った。

英国で地域小児看護師として勤務している看護師からの情報収集

先行研究を検討した結果、英国では地域小児看護師という資格をもった看護師がクリニックを開業して慢性疾患の子どもと家族にプライマリーケアをしていることが分かった。Achieving for children の Associate Director より、Moor Lane Center, Northern Health Center, Sussex Community NHS Foundation Trust の紹介を受けて視察を行い、実際のケア内容および工夫点などについて地域小児看護師より情報収集を行った。

(2) 看護ケアプログラムの作成

文献検討

医学中央雑誌 Web 版 (Ver.5) を使用して文献検索を行った。「慢性疾患」、「小児」、「地域」、「看護」を文献のキーワードとして、1987 年から 2017 年までの全文献を対象とした。その結果、本研究の目的に沿った 56 文献について検討した。

研究者間による検討

文献検討の結果や専門家からの情報収集を検討し、ケアプログラムの内容に必要な項目を抽出した。その後、ケアの対象として子どもと家族、クリニックに勤務する看護師自身に必要な項目についての 3 つの内容に分類した。研究者間で検討を重ねて内容を決定した後、看護師に提供する方法についてさらに検討を行った。

(3) ケアプログラムの評価検証をするための調査研究

研究対象者

研究協力を得た関西圏の小児科クリニックに、慢性疾患と診断されて定期的に受診している子どもの家族

調査内容

研究者間で検討し無記名式質問紙を作成した。内容として、属性、子どもの疾患、受診の頻度、治療の内容、疾患の理解、子どもへのセルフケアの状況、社会資源の活用、看護師からの支援状況等を含む 20 項目である。

調査方法

2022 年 8~9 月に、研究協力者であるクリニックの看護師が研究対象者の受診時に研究協力を依頼し、質問紙を配布した。質問紙は郵送またはクリニックで回収を行った。その後、研究協力者であるクリニックの看護師は、研究者が作成した Web 版ケアプログラムを自分の自由な時間に自分のペースで学習をしてもらった。

2023 年 5 月に介入後の質問紙を配布、回収した。

倫理的配慮

研究対象者であるクリニックに定期受診する子どもの家族に対して倫理的配慮を行った。ケアプログラム実施前に書面と口頭にて研究の目的等を説明し、質問紙の返信をもって同意を得たことと判断した。研究への参加は個人の自由意思を保障し、研究への参加を断った場合であっても不利益を被ることはないことを説明した。質問紙調査は無記名で行い研究にて知り得たデータについては、個人情報特定できないよう、記録の時点で氏名や施設名等を匿名にし、データは厳重管理した。研究実施の際には、所属機関の人間を対象とする研究倫理委員会の承認を得た。

4. 研究成果

(1) 専門家からの情報収集および視察を通しての結果と考察

小児アレルギーエドゥケーターからの情報収集

2018 年 2 月に看護師より情報収集を行った。クリニックは地域社会とのつながりは欠かさない、子どもは社会生活をしているため、学校・習い事など生活の中で診察や看護など時間の確保の難しさがあり、それらを考慮した支援が必要だと語っていた。また、クリニックで勤務することは子どもの成長と一緒にみていることができ、それは楽しさでもあるということ

であった。

慢性疾患の場合、学校管理指導表が提出されている子どもがおり、困ったことや相談したいことなどがあれば直接連絡するようにしており、学校に伺ったところ、思っている以上に学校が困っているということがわかったようである。学校の先生が集まる講習会などで、困った際の相談のアナウンスをしているが、その時は特に相談事がみられないが、実際に学校へ出向くと課題があることが見いだされている。これはいわゆるアウトリーチ活動であり、支援の必要性を自覚していない場合には効果的である。いかに子どもが自分のこととして理解し、自分の状況をわかっていくことが重要である。

また、クリニックで勤務する看護師間の理解と協力がまず必要だと考えていた。クリニックはその地域に住む子どもやその家族にとって、病気のときも健康なときも受診する大切な施設であるため、求められることも多岐に亘っている。成長発達から慢性疾患にいたるまで、「どれが大事」ではなく、「どれも大事」だと思つたため、勤務するスタッフがお互いを理解し、より良い形での支援につなげていけるように協力することが大事であると語っていた。しかし、限られた時間やスタッフ、経済的な面でも課題はあるとのことであった。

英国の地域小児看護師からの情報収集

2019年2月に Achieving for children の Associate Director を訪ねた。(Moor Lane Center) 病院で勤務していた看護師が地域で活動するようになった経緯などを語ってもらった。初めは喘息を専門にケアする看護師や新生児のケアをする看護師が地域で活動するようになったとのことだった。自宅で健康状態を保持するには、子どもだけではなく、家族を含めたサポートが必要であり、現在では病院での入院期間の短縮化により、サポートは十分でないということである。英国では、日本と異なり、看護基礎教育の段階から、地域での活動を見越したカリキュラムが取り入れられている。地域小児看護師という日本の小児専門看護師に相当する看護師が多くみられている。また、英国は NHS という国民保健サービスがとられており、その方針に沿って、ケアのシステム等が整えられており、ケアのガイドラインも多くみられている。

次に Northern Health Center に訪れ、ナースコンサルタントを始め地域小児看護師と協議を行った。病院勤務していた時に、小児がんの子どもが退院した地域での管理が困難な状況を体験し、病院内での看護の限界を感じて地域で活動するようになったとのことであった。同じような意志をもつ看護師と 24 時間体制で子どもと家族をサポートしていった。その後、NHS が確立していき現在では、入院していた病院との連携もスムーズに行えるようになっている。地域で活動するためには、看護職だけではなく、他職種との連携がより重要であることを考えるようになっていると語っていた。

さらに、英国の南部に位置する Sussex Community NHS Foundation Trust に訪れて、地域小児看護師と協議を行った。West Sussex 地区を担当しており、そこに 3 つの地域看護チームがある。それぞれのチームが管轄する地域の子どものケアを行っているとのことであった。3 つのチームがある地域には special school が 1~3 校ある。訪問したチームで特に取り組まれているのが排泄ケアであった。具体的には幼児に対するトイレトレーニングや便秘のケアである。生活の中でのコントロールなどの助言を行っており、成長発達段階における健康課題についても取り組まれており、包括的なケアであることが示唆された。

(2) 看護ケアプログラムの内容と看護師への提供方法

文献検討の結果、以下の【項目】が抽出された。

子どもへのケア項目として、【小児自身の疾患の理解】、【療養や日常生活の自己決定】、【移行支援】が抽出され、家族へのケア項目として、【社会（園や学校）との連携】、【子育てに関わる助成等の医療制度】が抽出された。クリニックに勤務する看護師自身の課題における項目として、【発達段階に沿った小児の主体性を支持するための診察援助】、【処置検査時の安全確保や不安軽減】、【発達段階に合わせた生活支援】が抽出された。さらに、クリニックに勤務する看護師に求められるケア項目として、【生活をイメージした療養方法】、【自宅での感染予防の方法】、【小児の生活に沿った予防接種の方法】が抽出された。

ケアの内容を検討した後、プログラムの目標を設定した。看護師が子どもと家族に対して実施するケアプログラムの目標として、「小児の認知発達の特徴を理解できる」、「プレパレーションの基礎について理解できる」、「小児が主体的に参加できる診察援助を考える」、「小児の生活を把握した上でセルフケア能力を高めるためのケアができる」、「発達段階に応じた感染予防行動をとることができるように支援できる」、「発達段階に応じた予防接種を適切に受けることができるように支援できる」、「小児の医療や子育てに関する助成制度を理解して家族に助言できる」、「学校園での小児の生活を理解して学校園に必要な情報が提供できる」を設定した。また、基本的な知識として「慢性疾患をもつ小児と家族の特徴が理解できる」、「慢性疾患をもつ小児と家族の生活援助について考えることができる」を追加した。

地域のクリニックに勤務する看護師の課題についての項目として、【地域のクリニックは気軽に相談できる場】、【看護職のコーディネート機能の強化】、【看護職の研修強化と啓発】、【クリニックナース間の交流】が抽出された。これらの項目に対するプログラムの目標として、「小児や親は日常生活の中での困りごとを気軽に相談することができる」、「地域で生活する小児と家族が適切な療養行動がとれて QOL の向上のために看護師のコーディネート機能を高める

ことができる」,「クリニックナースが研修に対する認識を高めて研修を受けることができる」,「クリニックで働く看護師間で交流することができる」と設定した。

以上のように、地域のクリニックに勤務する看護師に必要なケア内容として、慢性疾患をもつ子どもの発達段階別のセルフケア等、病状に関連する事項以外に、地域で生活するという視点での学業や社会福祉サービス、医療制度等の理解が不可欠であることが示唆された。

次に、文献検討の結果をふまえて、クリニックで勤務する研究協力者を含めた研究者間会議を開催し、さらにケア内容を洗練し看護師がケアプログラムを学習するための方法について企画検討を行った。プログラムについては、ケア項目ごとに、目標、内容と方法、基本的知識を検討した。当初、対面での研修会を開催する予定であったが、COVID-19の影響を鑑みて、Web版の学習ツールを作成した。ケア項目のコンテンツは1つあたり10分～30分程度の音声入りのパワーポイントを作成した。

クリニックに勤務する看護師が自身の学習したい時間に自由に閲覧できるように、サイトのIDとパスワードを配布した。また、サイト内での質疑応答、別途質問用のメールアドレスを記載して、研究者と相互に対応できるようにした。

学習ツールには、コース概要、使い方を表示し、以下の内容を掲載した。

導入編

- 1 看護職の研修強化と啓発 (8分)
- 2 看護職間の交流 (11分)
- 3 気軽に相談できる場 コミュニケーションスキル (24分)
- 4 看護職のコーディネート機能の強化 (20分)

子どもと家族への看護ケアについての基礎知識

- 1 慢性疾患をもつ子どもと親の特徴と支援 (22分)
- 2 慢性疾患をもち青年期を迎える子どもと親 (12分)
- 3 生活をイメージした療養方法の提供 (26分)
- 4 発達段階の特徴とプレパレーション (30分)
- 5 受診時の子どもの見方～来院時のファーストタッチ～ (20分)
- 6 発達段階別の感染予防 (10分)
- 7 予防接種の種類と時期 (15分)

制度と連携について

- 1 子どもの医療、子育てに関する助成制度 (18分)
- 2 幼稚園・保育園や学校との連携 (14分)

(3) 調査研究の結果

研究協力施設である小児科クリニックに定期受診している子どもの家族の29名より、介入前の質問紙の回収を行った。子どもの年齢は平均5歳(1歳4か月～10歳)であった。疾患名は喘息14名、夜尿症2名、便秘2名、花粉症1名だった。介入後のアンケート調査については、回収中であり、今後前後の比較分析を行うと同時に、クリニックの看護師よりケアプログラムについての意見を収集して、プログラムの評価を行う予定である。

文献：

高橋百合子(2014)慢性疾患をもつ子どもの家族と関わる外来看護師の教育支援ニーズに関する研究,平成26年科学研究費助成事業研究成果報告書.

金井一薫(2013)我が国における“コミュニティ・ナース”養成の必要性和可能性についての提言,東京有明医療大学雑誌,5,47-55.

多田羅浩三(2008)イギリスにおける地域包括ケア体制の地平,海外社会保障研究,162,16-28.

宮島環(2015)開業小児科における食物アレルギーをもつ子どもと家族・地域への支援,小児看護,38(1),57-63.

内正子,二宮啓子,辻佐恵子,丸山浩枝(2012)小児科外来における患者・家族への喘息指導を通じた看護師の認識と行動の変化のプロセス,神戸市看護大学紀要,16,39-47.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 内正子、菅野由美子、丸山有希、二星淳吾
2. 発表標題 慢性疾患をもつ小児と家族への小児クリニックの看護師が実施するケアプログラム内容の検討：文献検討から
3. 学会等名 日本小児看護学会 第32回学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	菅野 由美子 (KANNO YUMIKO) (60549145)	神戸女子大学・看護学部・講師 (34511)	
研究分担者	丸山 有希 (MARUYAMA YUKI) (50759389)	神戸女子大学・看護学部・准教授 (34511)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------